

ESG/統合報告 Keyword vol.29

ESG、統合報告。新聞やメディアでよく目にするものの、専門的でよく分からない、という方も多いかもしれません。この分野に精通しているIR/サステナビリティ研究室の研究員が、"いまさら聞きにくい" 初歩的なキーワードの説明とともにポイントを分かりやすく解説します。

今回はサステナビリティ要素の定量化に関するホットな用語をピックアップしました。

1 ESGスコア

企業の環境(E)や社会(S)への影響やそれらへの対策、ガバナンス(G)の状況を、開示や報道を含む公開情報やエンゲージメントを通して直接入手した情報をもとにESG評価機関（専門の民間調査会社）が定量評価したスコア。

ココがポイント

世界共通の統一的な指標体系は存在せず、MSCI、FTSE Russell、S&Pグローバル等、民間企業がそれぞれ独自のスコアリングサービスを展開しているため、証券監督者国際機構（IOSCO）をはじめ、日本の金融庁の2022年の「ESG評価・データ提供機関に係る行動規範」等、ESG評価事業者に対するガイドラインが公表されています。指標は例えば温室効果ガス（GHG）排出量、水の使用、労働災害度数率（LTIFR）、安全衛生研修の実施等のESG非財務要素であり、提供事業者によって評価項目の数は数百から数千まで幅があります。対象企業は直接サービスを申し込んだ企業のみならず、なんらかの株価指数の構成銘柄等、一定の基準を満たした企業、数百社から数万社のユニバーサルで構成されます。評価方法は、個別の項目の点数を業種や企業規模等によって加重し1つのスコアに統合します。0から100の点数で相対的な位置を示すパーセンタイルランキング形式や、アルファベット等で区分する格付け（レーティング）形式などがあります。主な利用目的は、資金提供者が投資判断するためですが、企業の改善のための自己評価や、競合比較も想定されています。ESGスコアが優秀な銘柄は財務実績も良好である、あるいはリスク耐性が高いという相関を示す調査結果がよく引き合いに出されます。課題としては、統一基準がないため、使用するスコアによって同じ企業でも評価が分かれることがあること、第三者保証等によってスコアのデータ品質や信頼性が担保されていないスコアを使用した場合、グリーンウォッシングとみなされるリスクがあることです。反ESGの動きが見られる中、開示に自社スコアを勲章のように掲げるのみならず、評価により自社の弱点を知り、経営を改善するための診断ツールとして社内プロセスに組み込み、企業価値創造やリスク削減につなげることが最も効果的と考えられます。

2 インパクト評価 (Impact assessment)

企業活動（事業、製品、サプライチェーン等）が、社会や環境に与える「プラスおよびマイナスの変化（影響）」を特定・測定・管理し、経営戦略や情報開示に組み込むプロセス。

ココがポイント

昨今のESG文脈において、企業が社会にもたらす「インパクト」は、漠然とした「良い影響」として語られがちです。しかし、これを単なるアピールで終わらせず、事業が「具体的に誰に、どのような、どの程度の変化をもたらしたか？」という因果関係として客観的に測り、事業を改善していくマネジメントの過程へと捉え直すのが「インパクト評価」です。

企業が実務としてこれに取り組む場合、まだ発展途上の分野ゆえに以下の壁に直面します。

因果関係とデータの壁： 自社の事業と社会の変化を直接結びつけることは難しく、データ収集には多大なコストと負荷がかかります。

形骸化とウォッシュのリスク： 標準化された指標が不足しているため、都合の良いデータだけを並べる「インパクトウォッシュ」と批判されたり、開示のための手続きが目的化（チェックボックス化）したりする懸念があります。

現在、欧州のダブルマテリアリティ対応などを筆頭に、過度な開示要求は企業の重荷となっており、世界の制度開示の実務においては「開示の簡素化・重要事項への絞り込み」という揺り戻しが起きています。

このような環境下において、企業が「すべてを厳密に定量化・開示するためのインパクト評価」を目指すのは無理があります。むしろ、自社の核となる新規事業や新技術の社会実装において、「自社がどのように社会課題を解決し、価値を生むのか」という論理（変化のシナリオ）や、社会・環境に悪影響をもたらさないかモニタリングするリスク管理策として体系化し、社内外で共有するためのマネジメントツールとして位置づけるのが実用的です。

開示上は、不確実性を受け入れつつも、自社の本業に直結する数少ないテーマに絞り、その「計測と改善のプロセス」を透明性をもって示すことが、結果的にステークホルダーへの最も説得力ある説明となり、企業価値の向上につながります。